

語林類葉

ぬねの

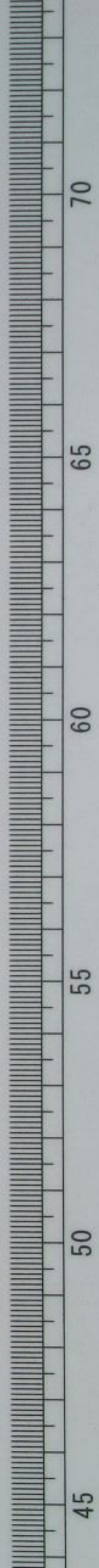
十三

三

ホ 2

502

13



Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

ぬまの 盗

拾遺 ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。○東万侶前云白浪の多

川ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

統詞花戯咲 後不義孝

ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

同歌ありし 賀茂主保

あやぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

同 源仲正

あやぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

二余大皇太后宮大式集

ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

全意下

ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

○竹取かや姫ふ大ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。○宇都保 国譲上

今本 ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。○枕冊

子 ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。○宇治

拾遺

ぬまの

古今雜上 ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

拾遺 ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

同意二

ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。

○古今諸説 ぬまの山とありしをぬまの山と改めしなり。可考合類分余枚雜上に

ぬまの

ぬらひく

兼花同宴廿五 さらしのうちとぬらつき。枕冊子廿三

ち たりとんじりとちらさきぬらつきはまにもゆて。

ぬきあ

今昔廿七十 密ニ拔足ニ登テ。

ぬのむき、 布引。今俗年拭引ト云戯藝。

紀略七年八月九日於綾綺殿相撲五番布引。

同長元六年八月六日己亥関白九大臣家召相

撲人等給饌並根物右色草有布引五番の宇都

係うら 是海をいそいでしものりて。

きしぬのむき水はひらいた。

ぬのむき、 夕エス引ッ、キッ、云々。計真華。

小嶋口号道もさあはぬのりたつき。○神葉日

記衆説神人一二万人も布引にのほりあひはる。○太

平記廿三 聖廟ノ御縁日ニテ参詣ノ貴賤又ノ

ゆきまき

古今雜訓

ゆきまき 雪のふり

拾遺雜記

ゆきまき 雪のふり

大和物語

ゆきまき 雪のふり

拾遺雜記

ゆきまき 雪のふり

後撰

ゆきまき 雪のふり

同巻五

ゆきまき 雪のふり

返

ゆきまき 雪のふり

同巻一

ゆきまき 雪のふり

同巻四

ゆきまき 雪のふり

六帖

伊物

後撰雜三

ゆきまき 雪のふり

同巻四

ゆきまき 雪のふり

○後撰 正義云ゆきまきなるとふ事本説る昔ゆきまき娘

持多の人はゆきまきをうけて后にもゆきまきを思ひつゝほ

ゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほ

ゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほ

ゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほ

ゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほゆきまきを思ひつゝほ

六言

ちけぢゝ人

源 後合

家女子のあつたう 招くみぢけぢゝ人のあつても
おのゝ ちけぢゝ人と同じくしてつゝ子位
くのちけぢゝ人の長くいへどもさなうさう

ちけぢゝ人

熱病

今昔廿七廿三 其怖しと思ケル気ニヤ日末又ルニ 温テ
十二病ケル〇

七言

ちけぢゝ人

東鑑十九廿八 不縫帷

シタ子
シラ子
又子
碓子
タハ子
アガ子
サラ子

祝の初

一言

祝

音。非情ノ物ニイハレ鐘ノ音。サラン

万代秋下 実方

秋の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初

栗麻子

夫木世六

散木 経信々つら 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初

夫木世六

眞鎮

祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初

同同

後京極

祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初 祝の初

寛平御記小右記 河海花鳥委注 ○今昔廿八

猫恐ノ大夫灰毛斑ナル猫

夫木世七猫御集 花山院

志き鴻のさゆとみいあるが移るを君り多欲みそ求出を

○ い侍系ハミ条の大皇太后をさう猫をそとをーの人のもとゆりー
こをのりゆりーをさうして多きまゆりーに痛のなきをさきに
うしてらむにつゆきてを
もきー侍系とさ

祐さう 年三

源 玉う 世をうき地におほし移るゆりーをー何

年三長斎經云若有善男子女等修年三之斎戒

忽脱諸難等獲殊勝福利 年三ハ正五九月月

年三
月六
年星

六ハ六斎也○後撰世祐さうのまゆりーを女祖越

のまゆりーをゆりーゆりーをさうしてをーゆりー 仙祐法師

百とせにハとせをさうしてゆりー玉のまゆりーを君りさゆりー

○ 一説年星あし年 ○本命属星見拾苾下○今

昔十二条 高尾寺ニ籠リ居テ年三ニ斎戒ナ

行フニ○

祐して

弟花 又もかき祐してゆりーをさうして

此の如く新の浦 うほにうき水 一ちまのまゝ。○遊仙
窟故々子タマシカホニ 将織手取々弄小絃。おとにり源も浦も玄
らり。

寝伸子、ビ

今昔廿三寝延ヲスル様ニ打ウメキテ○

果新ふ子

今昔廿七五十四 其山ヲ彼ノ口通ケルニ馬眠ヲ
シテ徒然カリケルニ打驚マニニ○

居新ふ子

新浦ら 寐待

オキフシ待

五代雜一 新浦の月をくまき待たに 公任
新て浦ととあまの月をくまき待た 公任

○家集 可考 ○後拾雅 一入道 抄改抄 新として詠

浦らの月共出づはしき ○契沖云 新浦ら廿日く

続古哀三 定文家分合に 坂上是則
新て浦をくまの月のまじりかたもあまの月をくまき待た

○家集追加ニ入 ○風雅意ニ伏見院 抄改六帖

題めてくまに新を待せまのりた一秋 新をくまき待た

おとと 新大納言為兼

新の月をくまき待たの月をくまき待たの月をくまき待た

散木 山中郭公

ほろほろきびあけ、秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

○注 秋はゆめと一秋心に宿して夢をさすは、秋をさすは秋を

さすは、とさすは、秋と郭公の秋をさすは、秋をさすは、秋をさすは、秋を

さすは、秋を

林葉二

ほろほろきびあけ、秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

同回

拾玉七

秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

千秋下 公経

秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

夫木三家集 経信

秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

飛鳥井集 岡子親

朝戸あけの秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

夫木 卍

秋 五 五 練麻を

拾遺卷三 いろり秋

かみをひきあけ、秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

後拾遺卷四 義孝

かみをひきあけ、秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

万代春止垣根梅花 経信

かみをひきあけ、秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

同卷二 道因法師

かみをひきあけ、秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

新六季は知家

かみをひきあけ、秋はゆめさびしき母のこころをさすもせぬ

夫木 卍一

き時ハきのえ祢の林。

祢ハ 無念

木願状 行方えうーぬひぬ祢ハぬーとあまきぬを
まほとに。

祢弓うき 練柿 熟ーきーて 季叶。契云俗云の祢ハ柿の熟。

拾遺物名 祢弓うき 未詳 土行
一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊

祢弓きぬ

中形係 同 祢弓きぬを錦を入れて儀にぬきせ。

同 同 了みハ祢弓きぬ一冊ハ祢弓きぬ系。

のいときぬぬき入き。

祢弓つて

盛衰記十五里ヌリノ大カノ 三尺五寸アルニ

練ツハ入テ。

五言

祢うんく

続古雜上 西行

秋のそくは花のもとをゆく人かたはるかに

拾玉

秋のそくは花のもとをゆく人かたはるかに

同同廿四

新古今 意門

○隆信集 俊成々長分
秋のそくは蓮の池にゆくあそ

にふの思ひをゆく

秋のそくは 無根草

実方集

あつ川にあふ秋のそくをゆく人かたはるかに

夫木

秋のそくは

久母百首

六帖秋例 草

十雜中

あひをゆく人かたはるかに

○朗詠無常離根草

六言

秋のそくは

拾遺表 人九

あひをゆく人かたはるかに

秋のそくは

○

の 熨斗 新振楽記 ○今云ヒノシ

垂仁四年紀第六曰瀆尉斗皇女

○大鏡五 兼通条 床多し時に「たきね」の「きちき」

女房之四人を「う」してきて「うね」は「よ」の「き」

を「あ」も「う」の「あ」も「ね」も「き」は「う」も「う」

源 玉う「う」の「う」の「う」の「う」の「う」の「う」

き「う」け 細 練絹を張「う」の「う」の「う」の「う」の「う」

着之○和名抄裁縫具熨斗

の 十 観

平作物語 位極流派条 の「あ」も「う」○

の 菓

和名抄野豆

の 賭

続詞苑戲笑人「あ」も「う」を「う」も「う」の「う」の「う」
の「う」の「う」の「う」の「う」の「う」の「う」の「う」の「う」

ノラマノ
ノラマコ

十ハノリ
アヲノリ
アマノリ
レサカノリ
ニタノリ
シホノリ

こゝろ思ふゆゑに公保

くも思ふゆゑに公保

○渡 宿木 とき、のち、そなへり、暴ノ賭物ナリ

のり

万十三 廿二長分 夕ゆきにあり、繩法 ○常盤楯物

語 既代不詳按大 ○赤染集三四十 あそびのり

為志朝臣家百部 松花のり、かゝるをば、かゝるをば

○庭訓青苔神馬藻曳干耳苔塩苔

のり 乘

隆信集下 月日のり、かゝるをば、かゝるをば

○拾遺雜秋延喜十九年九月十日伊原月日

のりて既渡後 後撰雜一葉 伊原

かゝるをば、かゝるをば、かゝるをば

著聞十七、かゝるをば、かゝるをば

別紙、かゝるをば、かゝるをば

かゝるをば、かゝるをば、かゝるをば

○水鏡中 天武 あれ、かゝるをば、かゝるをば

心ニノル
月ニノル
醉ニノル
勝ニノル

神七うけ多そしぬきみしとそゆき免き○

三言

野クモ

後撰雜四

同離別

いづれにまじりてしるすもあはれしそ通すもあはれしそ

のそく 窺見也

夫木土 源仲綱

まほの池水のそまそまをさしけししとそそ身を捨る

○紫日記

野野鞆袴

野太刀 四言

金葉雜上 野太刀のそまありしそんぬきしそ

東鑑四十二 十七

野ふ

拾遺

栗のほり

今昔廿七 廿八 大宮登りニ遊テ去又○

法ノ海
法ノ門
法ノモリ

法の集ト

法の海 分類海 ○法の門 同上門

○ きのもしん法のほろりとらひてそりう山中を神々免り心

のろむ 咒咀

弟元 同宴 のろむ解とくひつん中に ○同花山き

あくのろくーまはととあなうー○

四言

野心ノココロ

定家鷹三百巻 孝女川のうらうらにありあきや野んもぬさうもん

○

野宿ノシユク

林葉六遠きあつらうをくると野宿してんはあは

えけりー○今昔廿五十三阿久利河ノ辺ニ野宿ニ

タルニ○

のろむ

都土産 个ハナレノ 一ツに解りて ○ 宇都保 後
野々 一ツの 一ツの 一ツの 一ツの ○ 源 蓬生
く 一ツの 一ツの 一ツの 一ツの ○

の 号 志 乘 尻

宇都保 春日詣 の 号 志 一ツの 一ツの 一ツの 一ツの ○

同 祭 使 の 号 志 一ツの 一ツの 一ツの 一ツの ○ 伊馬 たちと 一ツの 一ツの 一ツの 一ツの ○

江次 弟 春日 祭 掛 云 上 御 相 具 神 馬 十

列 謂 乘 尻 也 ○

六

の 号 志

弟 花 一ツの 一ツの 一ツの 一ツの ○

ん の 号 志 ○

六

五言

残 哥

五代 哀 一 延 喜 十 三 年 亭 子 院 分 合 の 残 哥

○ 同 意 二 同 ○ 同 二 同 ○ 同 复 同 ○

の 号 志

万代雜二

右邊持基氏

○ 風よき浦の波よきはよき浪のちよきかきぬこ

六言

のつし詞

源 東屋

よの浦の波よきはよき浪のちよきかきぬこ

のつし詞

かきぬこ

源 千留

かきぬこ

のつし詞

宇部保

花開

かきぬこ

源 〇

六言

のつし詞

古今雜上

かきぬこ

後撰意四

かきぬこ

同底三

かきぬこ

○ 能因旁枕云野中の清きとよきを

袂衣四

詞花巻下

壬二集下

山家集下卅六

めきりけうみ

二条大武集

清輔集

あはれきりけうみのまにのまゆみよきつねん
あはれきりけうみのまにのまゆみよきつねん
あはれきりけうみのまにのまゆみよきつねん

神

のまはあはれきり

法皇

佛足石哥

○子載序ふのまは

まきくにうはれきり○増鏡春別法のあ

うはれきりうはれきりうはれきり○

1871

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

20 21 22 23 24 25 26 27 28 29

30 31 32 33 34 35 36 37 38 39

40 41 42 43 44 45 46 47 48 49

50 51 52 53 54 55 56 57 58 59

60 61 62 63 64 65 66 67 68 69

70 71 72 73 74 75 76 77 78 79

80 81 82 83 84 85 86 87 88 89

90 91 92 93 94 95 96 97 98 99

100 101 102 103 104 105 106 107 108 109

110 111 112 113 114 115 116 117 118 119

120 121 122 123 124 125 126 127 128 129

130 131 132 133 134 135 136 137 138 139

